



Title	地域の視点を持つ「よそ者」として
Author(s)	敷田, 麻実
Citation	朝日新聞
Issue Date	2003-08-13
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/34969
Rights	本著作物は、朝日新聞社の許可のもとに掲載しています。朝日新聞社の許可なく内容の全部又は一部を転載することを禁じます。承諾番号23-3141
Type	column
Note	石川版朝刊10版27面掲載、金沢アンダンテ
File Information	1285.pdf



[Instructions for use](#)

敷田 麻実

⑤

地域の視点を持つ「よそ者」として

金沢のよそ者

題字は五木寛之氏

1998年春、15年間勤めた県を退職し、大学の仕事に移った。もっとも、県

15年間同じ場所に勤めて、初めて変化を経験したが、「転ずる」ということ

があるから、海であり得る。その視点を持てたのだから、私にとっては意味のある幸せな転職であったと思う。

開放的な閉鎖性を

職員時代に自分の時間に研究していたことが仕事になっただけと言えはそれまでだし、沿岸域管理という分野は、水産の仕事とま

れはまさに「よそ者」の気分だった。よそ者は、普通はよそから地域を訪れる旅の人であり、漂泊の民、マドとも呼ばれるが、私は

にあって。地域をオープンにしなが、それでいて地



また、地域にいなからよそ者の視点を持つ優れた人は石川にも多い。よそ者は必ず地域の外から来るわけではなく、私が「地域内よそ者」とよぶキーパーソンも多々いる。地域は、その

が、多くのよそ者を惹きつける。実際、よそ者と協働するまちづくりに長けているところは、都市に近いとか、自由な風土があるとかではなく、開放的な閉鎖性を持つ地域が多い。

海岸に漂着するペットボトルなどのゴミ問題に取り組み、国内外の研究者や活動家と連携を続けている川賀市で

(金沢工業大学教授)